

らの数値実験も必要であろう。しかし、今何よりも切望されることは実際の降水セルの構造（上に述べたような垂直速度の分布、水滴の分布等）に関する確実なデータの積み重ねであろう。即ち、ドップラーレーダー、各種波長のレーダーを組み合わせた観測が必要である。これらの観測と対応させながら数値実験が行われた時、降水セルの研究も一段と発展するものと期待される。

文 献

1) Newton, C. W., 1967: Severe convective

storms. *Advances in Geophysics*, **12**, New York, Academic Press, 257-308.

2) Takeda, T., 1966: Effects of the prevailing wind with vertical shear on the convective cloud accompanied with heavy rainfall. *J. Meteor. Soc. Japan*, **44**, 129-144.

3) Takeda, T., 1971: Numerical simulation of a precipitating convective cloud: the formation of a "long-lasting" cloud. *J. Atmos. Sci.*, **28**, 350-376.

4) 武田喬男, 1971: 降水セルの力学と数値実験. *天気*, **18**, 9-19.

【新刊紹介】

齋藤鍊一・奥田節夫・齋藤亮平著

集中豪雨—新しい災害と防災—

日本放送出版協会・刊 285p ¥ 580

近年の風水害の特徴として、集中豪雨による死者が多い、ということが、各方面で、いろいろな資料にもとづいて指摘されている。とくに昨年7月の梅雨前線豪雨（昭和47年7月豪雨）における死者441人の災害は、記憶に新しいところである。このように集中豪雨災害は大きいにもかかわらず、これまで気象事業においては、ややもすれば集中豪雨を現在の子報技術の可能限界外の現象とみなし、「予報できなくても仕方がない」という考え方が根強く残っていた。しかし、この2、3年は、集中豪雨予報対策が真剣に進められ、従来、一部に見られた消極的、逃避的態度を排し、積極的にこれと取組むという大方針が打出された。そのような積極的な集中豪雨予報対策の推進者が、本書の著者の一人である。前・気象庁予報部長齋藤鍊一博士であった。これまで台風についての本はいく冊も出版されているが「集中豪雨」という題名の本は、本書が最初である。その最初の本の著者として、齋藤鍊一博士は、まことにふさわしい人であっ

たといえよう。

本書は I 集中豪雨の記録（齋藤亮平） II 集中豪雨の正体（齋藤鍊一） III 集中豪雨の災害（奥田節夫） IV 集中豪雨災害と住民（齋藤亮平） V 討論の各章から成り立っている。I、IV章はNHK 科学産業部に務めていた齋藤亮平氏の筆により、災害の実態や住民とのかかわり合いがなまなましく描き出されており、思わず息をのむような描写がある。II章では集中豪雨の気象学的本質が、スケールの観点からわかりやすく記されている。従来、このように明快に記されたものは、少なかったのではないと思われる。III章は、防災地形学専攻の京都大学の奥田節夫教授の筆になり、ここ多くの専門家は、斜面崩壊や土石流の実態についての気象貴重な新知識を得るであろう。

まことに時宜を得た好出版物といえる。

（倉嶋 厚）